

1. イエスは過越の祭りの六日前にベタニヤに来られた。
そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。
2. 人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。
そしてマルタは給仕していた。
ラザロは、イエスとともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。
3. マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、
イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。
家は香油のかおりでいっぱいになった。
4. ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。
5. 「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」
6. しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、
彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、
その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。
7. イエスは言われた。
「そのままにしておきなさい。
マリヤはわたしの葬りの日のために、それを取っておこうとしていたのです。」
8. あなたがたは、貧しい人々とはいつもいっしょにいるが、
わたしとはいつもいっしょにいるわけではないからです。」

説教

1. イエスは過越の祭りの六日前にベタニヤに来られた。
そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。
イエスさまは、エルサレムから東へ約3kmのベタニヤにあるマルタとマリヤの家に来られました。マルタとマリヤは姉妹で、ラザロはその兄弟でした。前の11章でイエスさまは、死んで四日も経ったラザロを墓の中からよみがえらせました。その直後の話です。
2. 人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。
そしてマルタは給仕していた。
ラザロは、イエスとともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。
以前は、ベタニアのこの家でイエスさまをあれこれもてなしてくれたのは、ただマルタひとりでした。でも今は、他の複数の人々が、イエスさまに晩餐を準備します。そして、相変わらずマルタはその中で、かつてのように給仕して(仕えて・奉仕して)おりました。しかし、ラザロは奉仕する者たちの中にはおらず、イエスさまと一緒に食卓に着いていました。すると、その食卓の席にマリヤがやって来て、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取り、イエスの足に塗り、髪の毛でイエスの足をぬぐったのでした。
3. マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、
イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。
家は香油のかおりでいっぱいになった。
ナルドの香油は、インドのヒマラヤ山中で採れるナルド(甘松香カシウウ)という香料で作ったものです。少し前でも、インドの香辛料は黒いダイヤと呼ばれて、ヨーロッパでは大変高価なものでした。そのインドの、し

かもヒマラヤの山中で採れる特別な植物です。それはどんなに高価で貴重なものだったことでしょう。

それをマリヤは惜しげもなく 300 ㌘も取ってイエスさまの足に塗ったのでした。それで、その大量の香油により家は香油の香りでいっぱいになります。何という気前の良さでしょうか。お姉さんのマルタも、犠牲を厭うことなく、惜しみなく、イエスさまのために奉仕しましたが、妹のマリヤも全く同様に、自分の最も大切な宝物を、イエスさまのために、惜しみなく使いました。実に献身的な姉妹です。先には、マリヤはイエスさまのために何もせず、イエスさまの話をただじいっと聞いていただけでしたが、この度はそうではありません。この度じいっと話を聞いてのは兄弟のラザロだけで、この度のマリヤは、もう話を聞くのは充分とばかり、居ても立ってもいられず、自分の捧げうる最善の、そして最高の捧げ物を、イエスさまに捧げたのでした。しかし、そこに水をさす偽善者が口を挟みます。イスカリオテのユダです。彼はマリヤを非難します。

4. ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。

5. 「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」

「一デナリ」とは、労働者 1 人の 1 日の労賃に相当する価値です。ちなみに、当時ローマの兵卒の年俵は 300 デナリでした。時代的な隔たりもあり、そう単純には換算できませんが、わかりやすくするため敢えて今日のお金に単純に換算すると、1 デナリ 1 万円と考えて、300 デナリなら 300 万円ということになります。つまり、ユダの計算通りにマリヤの捧げ物を計算すると、当時の相場で 300 万円もの大金を、マリヤがイエスさまに捧げた、ということになるのです。

そして、それをあのユダが非難しています。しかし、このユダは全く信用ならぬ者で、もともとは漁師あがりのペテロやヨハネとは違って、金の計算もでき、世のことに最も長けていたため、会計係の大役を任されていたのですが、その長けた才能をフルに発揮して、彼は実に狡賢く会計の金を着服しておりました。

福音書記者ヨハネはユダの行動をこう解説します。

6. しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、

彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に取められたものを、いつも盗んでいたからである。

つまり、これによってユダの言葉を解説すると、ユダは自分がそれを預かって 300 デナリで売り払い、貧しい者たちに施しをするの見せかけて、実は自分がその 300 デナリを着服する腹づもりであった。だからこそ、ここで怒りを燃やして、マリヤを非難したということなのでしょう。

ここに鋭い対比があります。イエスさまを食い物にして私腹を肥やそうとする者と、それとは正反対に、純粋にイエスさまのために自分の持てるすべてのものを捧げる者との対比です。言い方を変えると、イエスさまをだしに自分にご利益を受けていこうとする者と、それとは正反対に、自らの人生すべてをイエスさまに捧げる者との対比です。そして、イエスさまを食い物にしたユダは、最後は銀貨 30 枚欲しさに文字通りイエスさまを売り、十字架で殺した後、神のさばきを受けて首をつって自殺してしまいます。

このイエスさまを売ったという意味に於いては、戦時中の日本の教会と同じと言えます。戦時中の教会は、イエスさまのために生きるというより、自分の利益のためにイエスさまを食いものにし、自分に都合が悪くなると、さっさとイエスさまを捨てて生き残りをはかりました。イエスさまのために何かをするのではなく、自分のためにイエスさまを食いものにして、利用価値が無くなったら、あっさりユダのようにイエスさまを裏切り、イエスさまを敵に売り渡して、生き残りをはかったのです。

これに対して、マリヤはそうではありません。彼女は純粋にイエスさまのためにささげたのです。決して自分のためではありません。イエスさまのためです。イエスさまのために 300 万円を捧げました。イエスさまのために嫁入り道具を捧げました。イエスさまのために自分の未来を、自分の夢を、自分の人生を捧げたのです。

そして、それは実は少しも無駄にはなりませんでした。

「まことに、あなたがたに告げます。

世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、
この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」（マタイ 26:13）

このイエスさまの予告の通り、マリヤの献身ぶりは、世界中のどこでも福音が宣べ伝えられる所で一緒に語り伝えられて、マリヤの記念となりました。

ナルドの香油 300 珰は、マリヤにとって花嫁道具です。いわば結婚資金と言うべきものです。一生に一度の自分の結婚のために、大切に大切に貯め続けてきたものです。それを全部イエスさまに捧げてしまったら、その後の彼女の人生はどうなってしまうのでしょうか。ずうっと夢見てきた彼女の結婚はどうなるのでしょうか。でも、彼女はそんなことは全然考えませんでした。何のためらいもなく、すべてをイエスさまに捧げたのです。それは、彼女の人生そのものをイエスさまに捧げたに等しいことだと思います。

どうしてマリヤはそれほど高価な捧げ物を捧げることができたのでしょうか。彼女の人徳のおかげでしょうか。何でもとことんやらなければ気の済まない、人一倍熱心な性格の故でしょうか。そうではありません。それなら何の意味もありません。何の価値もありません。どうしてマリヤはそれほど高価な捧げ物を捧げることができたのか。その答えは簡単です。それは、マリヤがそれ以上の恵みを受けたからです。自分が捧げた以上の恵みを受けたから、彼女は 300 デナリを捧げることができたのです。どうして 300 デナリのものを捧げることが出来たか。それは少なくとも 300 デナリ以上の恵みを受けたからです。

その 300 デナリ以上の恵みとは何でしょうか。永遠のいのちです。復活のいのちです。そして、その話を前回、最初に出会った時に聞き、次には、その聞いた通りに、自分の兄弟ラザロが目の前で復活するのを目の当たりにすることで見せられました。死んで四日も経っていたのです。それなのに「ラザロよ、出てきなさい！」との呼び声に応じて、ラザロが復活して墓の中から出てきました。自分の兄弟がよみがえったのですよ。

まさに、イエスさまご自身が言われたように、

「わたしはよみがえりです。

いのちです。

わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」

イエスさまはいのちなるお方で、死んだ者にも永遠のいのちを与えることのできるお方なのです。それを今、少し前に、マリヤは目の前で見ました。天地がひっくり返るほどの衝撃です。それを見て、もう自分のコツコツ貯めてきた貯金も、結婚も、夢も、人生も、どうでもよくなったはずです。もしも永遠のいのちを知らなければ、この世で最高の宝は「金」です。ユダのように金、金、金、金ばかりで、金のために生き、金のために罪を犯して、金のために死にます。でも、金じゃ買えないものがあります。自分のいのちです。ラザロのように死んだら、どんなに金を積んだって、自分のいのちを買い戻すことなどできません。300 万円積んで自分が生き返ったら、金持ちは誰も死ぬ人はいません。でも、みんな死にました。父ちゃんも、母ちゃんも、爺ちゃんも、婆ちゃんも、金持ちも、貧乏人も、乞食も、総理大臣も死にます。みんな平等に死ぬのです。そして、死んだら終わりです。どんなに泣いても喚いても、優秀な医者を呼んでも、坊さんに頼んでも、死んだら誰も助けることはできません。300 万円積んでも、一億円積んでも、一度死んだら、人はもう二度と生き返ることはできないのです。自分のいのちを買い戻すことができません。でもつい先ほど、いのちを買い戻すことのできるお方を知りました。神の栄光を見ることのできるお方、死人をよみがえらせるお方、それがイエスさまであることをまざまざと思い知ったのです。地が震えました。天地がひっくり返ったのです。マリヤは、まさに天国を、神の国を見たのです。

そして、イエスさまのお話では、これからエルサレムで、私たちの罪を贖うために、私たちの身代わりのいけにえとして、死のうとしておられるというのです。その話をイエスさまは少なくとも弟子たちに三度話されました。おそらくマリヤにもそのことを話し、この場でも話していたに違いありません。そうなれば、もう二度とお会いできないに違いない。そこで、マリヤは、イエスさまのために何が出来るか考えました。そして、

イエスさまの葬りの準備のために、これからイエスさまが十字架に架けられても、墓に葬られても、ずっと血生臭い臭いを消すために、死臭を漂わせないために、自分のできる最善の、最高のこととして、自分の香油をイエスさまの足に注いだのでした。これを売ってしまえば自分の結婚はどうなってしまいか、自分の人生がかかっている香油、本当は、これだけは人にあげられないという香油、他のものはあげられても、これだけは人にあげられないという香油、自分の最も大切な香油、ナルドの香油、純粋なナルドの香油 300 グラをイエスさまに捧げたのです。

そして、それをイエスさまは喜ばれたのです。そして、これが彼女にとっても記念となりました。他の福音書では名無しだったのに、しかし、ヨハネはマリヤの名を記しました。本当に記念となったのです。

私たちも、マリヤのように、永遠のいのちへと召された者たちです。マリヤのように、喜びと感謝をもって、自分の最も大切なもの、ナルドの香油、人生を主に捧げて、純粋に主のために生きて、マリヤのように主のお役に立ちたいと心から願います。